

俺が妹の友達と仲良くなるなんて間違っている？！

いろはすりんご味

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日本屋に行こうとした俺は、ナンパされている中学生を助けた。なんとその子は小町の友達、水無瀬だった。

その事をきっかけに水無瀬と俺が、不器用ながらも徐々に仲良くなっていく話

目次

妹の友達を助けた俺は	1
お兄さんとお出かけは楽しい?! ①	6
お兄さんとお出かけは楽しい?! ②	12
小町ちゃんはやはり優しい	20
八幡さんと本屋で会った?!	26
八幡さんには彼女さんがいた?!	33
八幡さんの彼女じゃないとわかって? ①	38

妹の友達を助けた俺は

夏休みの最終日本屋に行く途中に大学生らしき人にナンパされている女子生徒を見つけた。見るからに中学生だとわかった。つていうか小町の学校と同じ制服だったしな。ここで助けなかったら、完璧に小町に怒られるしなあ。はあ、しょうがない。

「なああんたら、そんなことしてて恥ずかしくないの？ いい大人たちが中学生ナンパするとか、そういう性癖でもあるんですか？」

「な、なんだと貴様。俺たち大人を舐めてんのか？」

「舐めてんのはあんたらだろ。この騒ぎを見てもまだわかりませんか？ 今ここで俺を殴ればあんたらは間違いなく終わるぞ？ まあ終わってもいいんなら殴ってくださいよ。殴り返さないんで」

「く、くそ。覚えてろよ」

そう言つてナンパ野郎共は逃げていった。

ふう、終わったか。めちやくちや怖かったわ。なんなのあれ、殴られてたら即KOだったよ俺。

「あ、あの。助けてくれてありがとうございます。めちやくちや怖かったです」

そういつてその女子生徒は泣いてしまった。

「お、おい。泣くなよ。ここで泣かれたら俺が悪いみたいになっちゃうだろ」

そういつてその子の頭を無意識のうちに撫でていた。

「ふあつ」

そういつて顔が赤くなる女子生徒。

やべーよ、怒らせちまったよ。まあ当然か。こんな奴に撫でられたら誰だつて怒るよな。

「す、すまん。いつも妹にするみたいに撫でちまつて」

「い、いえ。大丈夫ですよ。それにとでも気持ちよかったですし」

最後の方は全然聞こえなかったが、まあ怒つてなかったみたいでよかった。

「そ、そうか。ならいいんだが」

「助けてもらつてなんですけど、どうして助けてくれたんですか？周りの人みたいに無視する事も出来ましたよね？」

「まあ最初はそのつもりだったんだが、その制服がうちの妹と同じだったからよ。もしかしたら妹友達かもしれないし、助けなかったら妹に嫌われるしな。まあそれだけだ」

「えっ？妹さん私と同じ学校なんですか？因みに名前はなんて言うんですか？」

「妹の名前は比企谷小町っていうんだが、君の友達だったか？」

「はい！友達ですよ！！しょっちゅう遊んだりもしてますから！！という事は、小町ちゃんのお兄さんなんですね！」

「お、おう、そうだが」

「私、水無瀬梨花つていいいます。よろしくお願いしますね！」

「お、おう。まあこれからも妹と仲良くしてやってくれると助かる。それじゃ俺、これから用事あるから」

「はい！今日はありがとうございます！」

「おう」

そういつて、俺は帰路についた。あんな事件があつたせいで、本買に行くの忘れちやつたじゃねーか。こんちきしょー。まあ、小町の友達助けれたし、よしとするか。

水無瀬 side

昨日あんな事があつたのにも関わらず、私はとても華やかな気持ちになっていた。まあ小町ちゃんのお兄さんに会えたっていうのもあるんだろうけどね。そういえば、名前聞くの忘れちゃつた。今日学校で小町ちゃんに聞こーと！そう思い私は学校に向かつた。

昼休み、いつものように小町ちゃんとご飯を食べている時に小町ちゃんに聞いてみることにした。

「小町ちゃん、お兄さんの名前教えてくれない？」

「いきなりどつたの、梨花ちゃん？」

「昨日、いろいろあつて、小町ちゃんのお兄さんにお世話になったんだ！その場でお礼したんだけど、もう一度改めてお礼したいなつて思つて」

「うちのお兄ちゃんがお礼されるような事してたなんて！小町感激！今日は帰つたらお兄ちゃんに甘えようかなあ〜」

小町ちゃんつて、ブラコンだよな。まあお兄さんもシスコンだし、この兄妹仲良すぎだと思ふ。

「それで、お兄さんの名前、なんていうの？」

「八幡だよ！比企谷八幡。あつ、なんなら今度の土曜日家に来る？」

「えつ、いいの？ありがとう!!楽しみだなあ〜!!」

「なら、10時に私の家に来てね！」

「うん！」

そうこう話しているうちに、昼休みが終わりを迎えた。八幡さんにまた会えるなんて思つてなかつたなあ。今から楽しみだなあ〜!!そんな事を考えているうちに午後の授業が終わつたみたいだった。

それからは一週間経つのが早く感じた。そして明日はいよいよ八幡さんの家に行く

日だ。学校が終わって家に帰り、明日のことを考える。

「明日は楽しみだなあ〜！八幡さんとなんの話をしようかな。なんの服着て行こうかな」などと考えているうちに、気がつけばもう午後11時になっていたため、明日のためには早く寝ることにしたが、明日が楽しみすぎて、なかなか眠りにつけない私だった。

お兄さんとお出かけは楽しい?!①

水無瀬 side

今日は待ちに待った八幡さんの家に行く日だ。昨日は楽しみすぎてあまり寝る事ができなかったけど、気にしない。早く準備しなくちゃ! 八幡さん、この服褒めてくれるかなあ?」

などと考えながら準備していた。

「お母さん、友達の家遊びに行つて来るね!」

「そんなにおめかししちゃって。いつもより気合入ってるね!」

母は嬉しそうに私をいじってくる。まあいつも通りなのだからしょうがないが。

「そんなに気合は入れてないよ! それじゃ、行つてきます!」

「行つてらっしゃい!」

私は八幡さんの家に向かった。歩いてる途中、ふと思い出した。前にも結構小町ちゃんの家で遊んだのに、八幡さんはみた事ないや。どうしてだろう?

そんな疑問が頭をよぎったが、気にしない。今日はたくさん八幡さんと遊ぼうと思う私だった。

八幡 side

「お兄ちゃん、起きてよ！今日は梨花ちゃんがくる日でしょ！」

俺は小町の声を聞き、渋々起きることにした。

「それ、初耳なんですけど。第一、小町と遊ぶんじゃないのかよ」

「そういえば言つてなかったかも。ごめんねお兄ちゃん」

小町が申し訳なさそうにしているため、咄嗟に小町の頭を撫でていた。

「まあ、別にいいんだがよ。俺は部屋にいればいいってことだよな？」

「いやいや、お兄ちゃんも遊ぶんだよ！っていうか、今日はお兄ちゃんにお礼がしたいってことで梨花ちゃんくるんだし」

「気にするなつて、ちゃんと言つたんだがな。その時もちちゃんとお礼されたし」

「まあお兄ちゃん、来てくれるんだからちゃんとした格好で降りて来てね！もしかなかっただらお兄ちゃんのこと嫌いになるかも」

「はあ、わかつたよ」

小町に嫌われたら、死んじやうレベル。ここは何としても嫌われないようにしなくては！・そう思い、俺は着替え、下に行つた。

「お兄ちゃん、流石にそれはないよ」

俺の服装を見て呆れる小町。そんな悪い服装だろうか。

「そんなんじやだめだよ、お兄ちゃん！小町がお兄ちゃんの服見繕ってあげる！」

「お、おう。サンキューな」

「小町におまかせあれ！」

ビシツとポーズを決めて俺の服を探しに行った。なにそれ、あざと可愛い。

小町が持つて来た服を着ている途中にインターホンが鳴る音がした。その音を聞き、小町はまだ俺がりビングで着替えているのにもかかわらず、普通にドアを開けて水無瀬を入れてしまった。

水無瀬 side

八幡さんの家の前にきて、後はインターホンを押すだけなのに緊張していた。いつもなら緊張しないのだが、なぜ今回は緊張してしまっている。それでも、勇気を振り絞って押した。

「いらつしやーい。梨花ちゃん、入っていいよ！」

「お邪魔します！」

そう言うって私は小町ちゃんとりビングに向かった。するとそこにはまだ着替え終わっていない、パンツ姿の八幡さんがいた。私は男性のパンツはお父さん以外のは見たことなかったため、めちやくちや顔が赤くなってしまった。

「は、八幡さん、パンツ姿もお似合いですね！」

なぜか無意識のうちにそんな事を言ってしまった。というか、よくよく考えると、私、ただの変態さんだよ。うう、嫌われちゃったかな。

「お、おう。ありがとな？」

八幡さんもどう反応したらいいのかわからず、慌てていた。

「ご、ごめんなさい。あ、あの私のこと、変態さんだと思いましたよね？」

「ま、まあ気にすんな。そんなことは断じて思っていないしな。どちらかというところツ姿でいた俺が悪いしな」

「そ、そうですか。よかったです」

私はとても喜んでいた。

「お兄ちゃん、早く着替えてくれない？ 梨花ちゃんの目に毒なんだけど。梨花ちゃんはまだ純粹のままできてほしいんだから！」

「お、おう、そうだな」

「小町ちゃん、私、そんなに気にしてないよ」

というか私も少しそういうのに興味あるんだよ。まあこれは言わないでおこう。

「それならいいけども。そうだ梨花ちゃん！ この後3人で遊びに行かない？」

「うん！ 遊びに行きたい！ 八幡さんはどうですか？」

「行きたくなっ……てきたなあー。それじゃ行くか」

小町、睨まないでくれよ。怖すぎて逆らえなかったじゃん。

「ほ、ほんとですか！嬉しいですよ！」

そういつて私は八幡さんの手を握っていた。

「な、なあ水無瀬。そろそろ手を離してくれないか？」

「は、はい。す、すみません、いきなり手なんか握ったら気持ち悪いですよね。ごめんなさい」

嬉しいからつていきなり手なんか握ったら、変な子だよ。今日の私、どうしちゃったんだろ？今までこんなことなかったのに。そんな事を考えていると頭を撫でられていた。なんだろう、とても落ち着いて気持ちいい。

「ふえっ?！」

「わ、悪い。小町にやる癖で撫でちゃった」

「い、いえ大丈夫です。とても気持ちよかったですし。もう少し撫でてほしいなあなんて」

徐々に私の声が小さくなっているのがわかる。恥ずかしすぎてこんな事言えないよ。聞こえてたらアウトだよ。というか、小町ちゃんはいつも撫でてもらってるんだ。いいなあ。

「そろそろ行くよー！」

「う、うん！」

「わかったよ。それで、どこに行くんだ？」

「ららぽーと行ってー、服とか見てー、後は適当」

「ま、荷物持ちくらいはしてやるよ」

「あの、八幡さんに荷物持ってもらおうって思ってますからね？自分の物は自分で待ちますから！八幡さんも楽しんでくださいね？」

「お、おう」

これから八幡さんと小町ちゃんと遊びに行くところであった。

お兄さんとのお出かけは楽しい?!②

水無瀬 side

八幡さんとお出かけれるなんて嬉しすぎです。ららぽーとに行く途中、小町ちゃんと八幡さんはずっと話してました。私は、その会話に入る事ができなかつたんですよ。あんな仲がいいと、小町ちゃんに少し嫉妬しちゃうよ。私も出来たらもう少しちゃんと話せるように頑張らないと。

「水無瀬、大丈夫か？悪いな、小町が無理に引っぱりだしちゃって」

「だ、大丈夫です。ただ、小町ちゃんと八幡さんって、仲良しさんだなくって」

「まあな。俺が誇れる妹だからな、小町は。正直、毎回小町には助けられてるんだよな。こんな兄でも見捨てないし。だから俺は小町が大事なんだよな。あつ、これ小町には内緒な？」

「わかりました！絶対に言いませんね!!」

「おう、頼む」

「はい！」

まさか八幡さんがここまで小町ちゃんの事を思ってたなんて。小町ちゃんは幸せも

んだね。少しだけ小町ちゃんに嫉妬しちゃう。なんでだろ？まあいつか。今は八幡さんとの買い物を楽しもう！そう思った私だったが、その後は八幡さんと会話できず、私はただ無言で目的地まで歩いた。

ららぽーとにつき、早速女性服コーナーの所に向かった。

「小町ー、服みてくるね！梨花ちゃんもいこう？」

「う、うん！」

「おう、行ったらー。俺はここで待ってるよ」

「えっ？八幡さん来てくれないんですか？」

「おう、2人で仲良く服選んでこい」

「私は、八幡さんに服選んでほしかったのに……」

そう言つて私は八幡さんの手を両手で握つていた。しかも何故か涙目になっていた。

そのうえ、八幡さんとの身長差があるため、必然的に上目遣いになってしまった。

「お、おう。でも俺、ファッションセンスないけどそれでもいいののか？」

「はい。八幡さんを選んでもらいたいです！」

「おう。わかつたよ」

「ありがとうございます！それじゃ行きましょう！」

そう言つて、私は八幡さんの手を引き、服屋の中に入る。

うう、恥ずかしいよ。私また八幡さんの手を握っちゃったよ。しかも涙目になっちゃうし。絶対八幡さん迷惑だと思ってるよね。めんどくさい子だっと思われちゃったよね。

「なあ、そろそろ手離してくんない？」

「ご、ごめんさい。手なんか握ったら迷惑でしたよね」

「いや、迷惑ではないが、なんていうか、こう恥ずかしいんだよ」

「ふえっ？」

まさか迷惑じゃなかったなんて。てつきりもう嫌われたと思ってたからよかった。よかった〜！

「それじゃ、服見繕って来ますね！」

「おう」

「八幡さんこれとこれ、どっちがいいですか？」

そう言っただけは右手に黒のフレアスカートと白のTシャツを持ち、左手には水色のミニワンピースを持っていた。

「俺は左のほうかな」

「わかりました！ならこれ買いますね！」

「ほんとにいいのか？自分で決めた方がいいと思うぞ？」

「いいのです！それじゃ、私買ってきますね」

そう言つてレジに持つて行こうとした時、八幡さんが「着てるとこ見てみたいしな」つて呟いているのが聞こえてきたため、とても嬉しかった。八幡さんにそう思われてるなんて思つてもいかなかったのです。なんだか泣きそうです。でもここで泣いたらまた迷惑かけちゃうので、家に帰つてから泣く事にしよう。

「買つてきました！小町ちゃんも今レジの所にいたのでそろそろくると思います」

「お、おうそうか」

「お兄ちゃんお待ちせよ」

「いや、そんなに待つてない。この後どうする？帰る？」

「これだからごみいちゃん。まだ帰るわけないでしょ！この後は少し雑貨屋さんに行きたいかな」

「了解。なら行くか」

「レッツゴー！」

何故かハイテンションな小町ちゃんでした。でも、見てとても可愛いなあと思つたよ。

雑貨屋さんにつき、今回はそれぞれ見たいものを見て回つた。私は少し髪が長くなつてきたと思つたので、ヘアピンを買おうか迷つていたが、結局買わなかつた。だつてこ

んなに可愛いヘアピンだと、似合わないんだもん。それぞれ買い物が終わり、八幡さんを見てみると、何かを買ったみたいだった。それにしても、袋が小さすぎないかな？もしかしたら小町ちゃんにプレゼントするものだったりするのかな？

「そろそろお昼ご飯食べよーよ、お兄ちゃん」

「おう、そうだな。水無瀬もそれでいいよな？」

「はい、それで大丈夫です」

「なら、サイズでいいよな？」

「全く、これだからお兄ちゃんは。もつとオシャレな所とかないの？」

「俺はサイズとなりたけ以外知らん」

「わ、私はサイズリアでもいいですよ？」

「ほらな？水無瀬はサイズの良さがわかってるんだよ」

「なんだかわからないが八幡さんに褒められた！嬉しいなあ〜!!」

「梨花ちゃんがいいならサイズでもいっか」

サイズに決まり、私たちは向かう事にした。

サイズでご飯を食べ、今は帰路についている。はあ、この楽しかった時間ももう終わっちゃうのかあ。なんか寂しいなあ。それに、今日は八幡さんに改めてお礼してきたのに、全然お礼できてない。むしろ迷惑しかかけてない気がする。

「八幡さん、今日は楽しかったです！それと、この前はほんとーにありがとうございました！」

何もできない私は、最高の笑顔でお礼を言った。今日のことと、この前のことのお礼をした。

「あーそのな。これやるよ。今日のお礼だ」

そう言つて八幡さんはさつき雑貨屋さんで買ったものを私にくれた。それ、小町ちゃんに買ったんじゃないやなくて、私のために買ってくださったと思うと、私はその場で泣いてしまった。

「あ、ありがとう、ございませぬ」

私は泣きながらお礼を言った。でもこれ、はたからみたら八幡さんが泣かせたみたいに見えるちゃうよね。

「お、おい。いきなり泣かないでくれよ。俺が泣かしたみたいになっちゃうじゃん」
そう言つて八幡さんは私を撫でてくれた。やっぱり八幡さんに撫でられると気持ちいいし、安心する。そのおかげで泣き止むことが出来た。

「その通りでしょお兄ちゃん。何かやらかしたんじゃないの？」

「なんもしてないんだが」

「いえ、八幡さんは何も悪くありません。泣きやすい私が悪いんです。小町ちゃんと

八幡さん、さようなら!」

そう言つて私はその場を離れた。家に着いた私は自分のベットで悶えていた。あう、あんな恥ずかしい姿、八幡さんにみられちゃったよ。今度会うときどんな顔して会えばいいかわかんないよ。でも頭撫でてもらった時は嬉しかったなあ。えへへ。気持ちよかつたし、安心できたんだよね。また撫でてくれないかなあ。そんなことを考えながら眠つてしまった。

お母さんに起こされ、時計をみると、丁度夕飯時だったため、ご飯を食べた。

「ねえねえ、今日は比企谷さんと何かあつた?」

「な、何もなかつたよ?」

「嘘だあ。絶対に手を繋いで歩いたとかはしてるよね?」

「し、してないもん。手を握っただけだもん」

「我が娘ながら可愛いなあ」

「も、もう。からかわないでよ。私、お風呂入つてくる!」

「行つてらっしゃい!」

お風呂に入つてから私はすぐに寝ることにした。今日は楽しいことだらけだった。また八幡さんと遊びに行きたいなあなどと考えながら眠る私だった。

小町ちゃんはやはり優しい

水無瀬 side

「梨花ー。起きなさいー！遅刻しちゃうよー！」

お母さんに起こされたが、寝不足のためあまり体調がよろしくない。背伸びをすると欠伸が出てしまった。

私はすぐにリビングに行き、朝ご飯を食べた。

「顔色悪そうだけど、大丈夫？」

お母さんに心配された。

「だ、大丈夫だよ？ただちよつと寝不足なだけだよ！」

「もしかして、昨日のこと考えてたら眠れなくなっただんでしょ？」

お母さんは私をからかうように聞いてきた。

「そ、そんなんじゃないもん！ただ昨日、帰ってすぐ寝ちゃったから、眠れなくなっ

ちやっただけだもん！」

顔を赤くしながらお母さんにそう言った。

「梨花は可愛いんだから♪」

何故かお母さんがうきうきしていた。

「もう、茶化さないでよ！」

私はご飯を食べ終わり、身支度を済ませた。昨日八幡さんに貰ったヘアピンをみるとなんだか嬉しくなってくる。そのヘアピンをつけて、私は学校に行った。

「おつはよー！梨花ちゃん！」

「おはよー！小町ちゃん！」

「あれ、なんか雰囲気が違う気がするけどなにかあったの？」

「多分このヘアピンじゃないかな？」

「なるほどね。雰囲気違うなあって思ってたけど、ヘアピンだったから。でも、梨花ちゃんヘアピン持ってなかったよね？」

「昨日八幡さんから貰ったのヘアピンだったんだよね！このヘアピン、一生大切にするんだ！」

えへへと笑って答えた。

「梨花ちゃん可愛いすぎ！」

「そ、そんなことないよ！小町ちゃんの方が可愛いよ！」

「それはないよ。でもあのお兄ちゃんがこんないいもの選べるなんてね。小町的にポイント高い！」

なにか小町ちゃんがぶつぶつ言っていたが何を言っているのか私は分からなかった。

「そういえば、梨花ちゃんはどうしてお礼をしたとか言い出したの?」

いきなり小町ちゃんにそんなことを聞かれた私は、とてもびっくりした。

「八幡さんには、私がナンパされてる時に助けてくれたの。他の人も気づいてたのにみんな知らん顔してたけど、八幡さんだけは違ってたんだよね」

「そうだったんだね。やーつと納得したよ!」

そんな話をしていると、担任の先生がきた。なので私たちは話すのをやめて、小町ちゃんは自分の席に戻っていった。午前中の授業も何事もなく終わり、今は昼休みだ。昼休み、いつものように小町ちゃんとご飯を食べていた。

「梨花ちゃん。お兄ちゃんの連絡先欲しい?」

急にそう言われた私は同様したと同時に、嬉しさも込み上げてきた。

「い、いいの? 八幡さんに迷惑かけちゃうんじゃない?」

「大丈夫だよ。私がなんとか言っとくからさ!」

「でも、それだと八幡さんが可哀想だよ。八幡さんに聞いてみて、ダメって言われたら諦める」

「はあー、梨花ちゃんはまだもう少し我儘言ってもいいんだよ? ていうかお兄ちゃんの連絡先なんて、家族を抜かせばほとんど知らないんだしさ。人助けだと思って」

「それでも、八幡さんには迷惑かけたくないの。だから無理矢理とか、ダメってなったら諦めるよ」

「なら、今日お兄ちゃんに聞いてみるね!」

「う、うん!」

八幡さんには迷惑しかかけてないから嫌われてると思うし、連絡先教えてもらえないよね。でも、もらえたら嬉しいなあ。八幡さんと通話なんかしちゃったりして。楽しみだなあ。

「おーい、梨花ちゃん? どうしたの? いきなり落ち込んだと思ったたら嬉しそうにしちゃって」

「う、ううん。なんでもないよ!」

「ほんとに?」

「ほんとだよ!」

「なら、そういうことにしとく。今日、夜に連絡するね! その時にお兄ちゃんの連絡先教えてもいいって言われたら教えるから!」

「うん! よろしくね!」

そんな話をしていると昼休みが終わりを迎えた。周りで食べていた男子たちがそわそわしてるけどどうしたんだろ?

もし八幡さんの連絡先もらえたらどうしようかなあ。嬉しすぎて布団の中でばたばたしちゃうかも。そんなことを考えてたら午後の授業が終わっていた。

「小町ちゃん、またね〜！」

「梨花ちゃん、夜連絡するね〜！」

「うん！」

家に帰るなり、うきうきしながら自分の部屋に戻った。パジャマに着替え、小町ちゃんからの連絡を待っていた。

携帯が鳴り、開いてみると小町ちゃんからだった。

「お兄ちゃんに聞いたらさ、ダメだつてさ」

そのメールを見た時、私は携帯を落とし、その場で泣きそうになっていた。あれ、なんで涙出てるんだろ？

「そっか」

そう短く返し、私は布団にくるまって泣いた。するとまた携帯が鳴り、開いてみると小町ちゃんだった。

「さっきのは冗談だよ。なんとあのお兄ちゃんが連絡先教えていいつてさ！びっくりだよ。あのお兄ちゃんが素直に教えるなんて。これ、お兄ちゃんのね！」

その文面を見た瞬間、さっきまで泣いていたはずなのに、めちやくちや嬉しくなって、

ガッツポーズしてしまっていた。

「ほんとにほんとに？嬉しすぎるよ！」

私は早速八幡さんに連絡することにした。

「うーん、なんて送ろうかな？長すぎると迷惑だよね？でも短すぎてもダメだよね？
悩んじゃうよ」

そんな事をぶつぶつ喋っていた。

「八幡さん、こんばんは！これからよろしくお願いします！それとこの前は逃げるよ
うに帰ってごめんなさい！」

あれこれ文面を考えるのに1時間くらいかかっちゃったが、なんとか送ることに成功
した。

いつ返信来るかなあなんて楽しみにしていたが、寝る時間になっても返信がこなかつ
た。やっぱり嫌われてるのかな？ほんとには断られてたのに、無理に小町ちゃんか教えてた
のかな？などと考えてしまう。その夜、私はあまり眠る事ができなかった。

八幡さんと本屋で会った?!

水無瀬 side

朝、いつもより早く目を覚ました私は、八幡さんから返信がきていないか確認した。すると、嬉しいことにちゃんと返信してくれていたみたいだった。

「(こちら)そよろしく」

短い文だったが、返信してくれた事が嬉しくて私は朝からテンションが上がっていた。

「よかった。無視されてなかったんだね」

そんなことを呟いてから、私は少し早いが学校に行く準備を始めた。今日はいつもより早く起きたぶん、余裕を持って学校に行く事が出来た。

「梨花ちゃん！おっはよー！」

いつものように小町ちゃんが私に挨拶をする。

「小町ちゃん、おはよう！」

「それで、昨日はお兄ちゃんに連絡した？」

「うん！したよ！」

「なんて返ってきたの？」

「これだよ！」

そう言つて昨日八幡さんからきたメールを小町ちゃんに見せた。

「あちゃー、うちのごみいちゃんがこんなでごめんね？」

「ううん、返信きただけでも嬉しいかったよ!!昨日、メールして、待つててもこなかったから、嫌われちゃったつて思つてたもん」

「梨花ちゃんは可愛いなあ〜」

そう言つて小町ちゃんが抱きついてくる。

「やめてよく。周りの男子達が見てるよ？」

「そりゃー、梨花ちゃんは可愛いからね!!」

「そ、そんなことないよ!小町ちゃんの方が可愛いよ!」

「梨花ちゃんは、男子からかなりモテてるんだよ?しよつちゆう小町に水無瀬さんの連絡先教えてくれない?つて言つてくる人が多くて困つてるんだから!」

「そ、そうなんだ。教えてないよね？」

「当たり前だよ!でも、梨花ちゃんは男子達の連絡先欲しいつて思わないの？」

「私は思わないかな。小町ちゃんがいれば充分だよ!」

「ありがとね!」

小町ちゃんと話していると先生がきたため、小町ちゃんは自分の席に戻って行った。八幡さんになってメールしようか悩んでいると放課後になつていた。

「梨花ちゃん、帰ろう!」

「ごめんね小町ちゃん。ちよつと用事あるの」

「そっか。用事なら仕方ないね!じゃっ、また明日!」

「うん!」

小町ちゃんと別れ、私は本屋さんに向かった。今日はラノベの新刊の発売日だから、買っておきたい。もしかしたら八幡さんもラノベ読んでもるかもしれないし、八幡さんとそういう話もしてみたいなあ〜と思いつながら向かった。

本屋につき、お目当のラノベを見つげ手に取ろうとすると、誰かと同時に取ろうとしてみたんだ。

「す、すみません。私はいいので、どうぞ」

そう言つて私はその人の顔を見ないままその本を差し出した。

「こちらこそ、すみません。って水無瀬じゃねーか」

えっ?この人私の名前知ってるの?もしかして知り合いかな?などと思いつながら顔を上げると、八幡さんだった。

「ふえっ?!八幡さんですか?」

「お、おう。俺もその本買いにきててな。まあ俺はまた今度買いにくるから、水無瀬に譲るわ」

「は、はい。ありがとうございます。まさか、八幡さんに会えるなんて、嬉しいです！」
「そ、そうか」

「はい！今この本買ってくるんで、待っててもらえないですか？」

「もう帰ろうと思つてただけど」

「だめ、ですか？」

そう言つて私は無意識の内に八幡さんに近づいていた。

「ち、近いから。離れてくれると助かるんだが」

「す、すみません」

はうら、恥ずかしいよ。八幡さんに近づき過ぎたよ。でも、八幡さんいい匂いしたなあ。つてこれじゃあ私、変態さんじゃないですか。

「待つてやるから、早く買ってこい」

「はい！」

そう言つて私は本を会計の所に持つていく。会計を済ませ八幡さんの元に戻つた。

八幡さんと、もう少しお話ししたいなあと思つている私だったが、八幡さんに迷惑かなと思ひ、帰ることにした。

「八幡さん、この本譲ってくれてありがとうございます。私は帰りますね」

「なら、送ってくぞ?もう暗いしな。この前みたいにナンパにあったなんて洒落にならないしな」

えっ?今八幡さんが私を送ってあげるって言ったの?八幡さんともう少し話し出来ると思うと顔が緩んでしまう。それより、八幡さんに迷惑じゃないかな?と思いは聞いてみることにした。

「ほんとにいいんですか?迷惑じゃないんですか?」

「おう。迷惑じゃないぞ?寧ろ送っていかなかったら小町に怒られるしな」

「ありがとうございます!それじゃ、帰りましょうか」

「お、おう」

本屋を出て、帰る途中、いろいろな話を八幡さんとした。主にアニメの話や、ラノベの話だったが、それでも楽しかった。それと、今日買ったラノベを貸す約束もできた。

「ここが私の家です。今日はありがとうございます」

「いや、俺がしたくてした事だしな。ていうか、水無瀬の家って俺ん家の通りだったんだな」

「はい!なのでいつも小町ちゃんと帰って来てます!」

「そ、そうか。まあ小町の事よろしく頼む。小町が男子と仲良くしてたら教えてくれ。」

ちよつとそいつ、お説教しないといけないから」

「小町ちゃん、いつも私といるので大丈夫ですよ？」

「それならいいんだが」

「はい！あの、今日この後メールしていいですか？」

「おう。返信遅くなると思うが、メールしてきていいぞ」

「ほんとですか!?!絶対メールしますね！」

「お、おう」

「それじゃ、また夜に」

「お、おう。それじゃーな」

「はいー！」

そう言つて私は八幡さんに手を振る。それに八幡さんは手を挙げて応えてくれた。家に入り、夜ご飯を食べ、お風呂に入った。お風呂の中で私は今日の出来事を思い出していた。

「まさか八幡さんに会えるなんて思つてなかつたよ。しかも送つてくれるなんて、嬉しすぎる。もう少しで泣いちゃう所だつたよ。泣いてたら、変な子つて思われてたよね。それにしても、八幡さんいい匂いしたなあ。つてだめだよ私。それじゃ変態さんになつちゃうよ。」

私は湯船から出て、頭や身体を洗い、お風呂を出た。

私は部屋に行きベツトに横になると、八幡さんにメールするのも忘れ、眠ってしまっ
た。

八幡さんには彼女さんがいた?!

八幡side

昨日本屋で水無瀬に会い、後でメールしますと言っていたが一向にくる気配がない。べ、別に期待なんかしてないんだけどね。……って誰に言ってるんですかね俺は。まあこのままメールがこなくてもいいんだがな。

「小町く、飯く」

「ちよつと待つててねお兄ちゃん。もう少しでできるからね!」

「あいよ」

そう言つて少しの間待つ。少しするとおかずにテーブルの上に並べられる。

「食べよつか、お兄ちゃん!」

「おう、そうだな」

「そういえばお兄ちゃん、今日帰つて来るのいつもより遅かったね?何してたの?」

「ん?本屋に寄つてきた。新刊あると思つたんだが、なくてな。何も買つてこなかったんだわ」

「そうだったんだね!それで、最近学校はどうなの?」

「ぼっちライフをエンジョイしてるぞ? まあ俺に話しかけてくれる人もいないし、俺から話しかける事もないしな」

「はあ、これだからごみいちちゃんは」

そう言つて呆れる小町。まあ無理もない。こんなダメダメな兄をもつていれば呆れるだろう。寧ろ呆れない方がおかしい。

「まあ、これが俺だしな。一人でも問題はない。寧ろ一人の方が何かと楽ししな」

「はあ……まあごみいちちゃんだししょうがないか」

「お、おう」

たわいもない話を小町としながらご飯を食べた。ご飯を食べ終わった俺は、お風呂に入つた。

お風呂から出た俺は、小町に風呂から上がった事を言つてから、自分の部屋に行った。ベットに横になつてしていると眠くなつてきたため、寝ることにした。

水無瀬 side

昨日そのまま寝てしまい、八幡さんにメールするのを忘れてました。昨日あんなにメールしますね! とか言つちやつたけど、八幡さん、怒つてないかな? 今からでも遅くないよね?

「昨日メールしますね! って言つておきながらメールせずにごめんなさい。怒つて、

ますよね？」

この内容でメールを送った。朝に送ったため、返信が返ってこなくてももしかたがない。

八幡さんにメールを送ってから、私は学校に行く準備を始めた。準備も終わり、メールが来てないか確認した。メールのところを確認すると、八幡さんからメールが来ていた！それだけでめちゃくちゃ嬉しくなった私は、テンションが上がっていた。

「別に気にしてないぞ？それに怒ってないしな」

という内容だった。朝返信が来たことも嬉しかったが、何より怒ってないことに安心した。

「お母さん、行ってきますー！」

そう言つて玄関で靴を履いていると、お母さんがいきなり私の顔を見てニヤニヤしていた。

「顔、ニヤニヤしてるけど、何かいいことあったの？」

お母さんは意地悪そうに聞いてくる。

「な、何でもないよー！」

「もしかして比企谷くんのことでもいいことあった？」

「は、八幡さんは関係ないよー！」

と言った私だったが、八幡さんの事を言われ顔を赤くしてしまったため、お母さんにはバレてしまっているだろう。

「帰ってきたら詳しく話聞かせてね!」

ウインクしながら私に言ってきた。恥ずかしくなった私は、急いで家を出た。

「梨花ちゃん!おっはよー!」

小町が私を見るなり抱きついてきた。なので私も小町ちゃんを抱きしめた。

「小町ちゃん、おはよー!」

「およ?いつもなら私が抱きついてても、抱きしめてくれなかったのに、どしたの?」
「ちよつとね、嬉しいことあったから!」

思いだしただけでニヤニヤしちやっていた。

「梨花ちゃん、ニヤけてるけど、何が嬉しかったの?」

「えへへ。八幡さんから、メールの返信がきたんだよね!」

「ほーん、あのお兄ちゃんがね。んで、どんな内容だったの?」

「これだよー!」

そう言っつて私は携帯の画面を見せた。見た小町ちゃんは溜息をもらしていた。

「はあー、あのごみいちゃんは」

「えへへ。朝、嬉しすぎてニヤニヤしちやつてたよ」

「まあ梨花ちゃんが幸せならそれでいいか！」

その後、先生がきたため、小町ちゃんと話すのをやめた。授業も終わり、後は帰るだけなのだが、今日はやけにみんなから心配された。なんでだろう？まあいいか♪帰ったら、八幡さんにまたメール送ろつと。返信してくれるかな？などと考えながら歩いてると、八幡さんが見えた。

「八幡さ……」

声をかけようと、八幡さんの名前を呼ぼうとしたら、八幡さんの隣に、八幡さんと楽しそうに話している女性がいた。それを目撃した私は、途中で呼ぶのをやめた。

そのまま八幡さんに気づかれずに家に帰った。

八幡さんと楽しく話してた人、八幡さんの彼女さんだよな？そ、そうだよな。八幡さんに彼女さんがいても普通だよな。私、浮かれすぎてたよ。あ、れ？私なんて涙なんか流してるんだろ？そうそう、八幡さんにメールするのはやめないとね。彼女さんにも申し訳ないよね。

そのまま私は眠りについた。

八幡さんの彼女じゃないとわかって?①

水無瀬 side

昨日の帰り道で、八幡さんが彼女さんらしき人と歩いているのを見てから、もやもやが消えないでいた。

「梨花ちゃん、朝だよー！起きなさいー！」

お母さんに起こされたため、私は渋々起きた。

「あら、梨花ちゃん。元気ないみたいだけど、どうしたの？何かあったらお母さんにいつてみなさい？」

「ううん、なんでもないよ。今お腹空いてないから、朝ご飯は大丈夫！」

「そ、そう。何かあったらお母さんに言ってね？」

「うん！」

そうは言ったもののお母さんには言えないよね。まさか八幡さんに彼女さんがいたなんて言ったら、何言われるかわかったもんじやないもんね。

「それじゃ、行ってきます」

「行ってらっしゃーい！」

家を出て、学校に向かった。学校につくと、まだ小町ちゃんがきていなかったため、自分の席に座る。

小町ちゃんに昨日あつた話したほうがいいのかな？ いや、したほうがいいに決まつてよ。それでもう気にしなくていいよつてちやんと言わなきゃね。

「梨花ちゃん！ おつはよー!!」

すると小町ちゃんがきたみたいで私に挨拶してくれた。

「小町ちゃん、おはよ」

「およよ？ 元気ないみたいだけどつたの？」

「…昨日帰り道で八幡さんを見かけたんだけどさ。隣に可愛い彼女さんらしき人が居たんだよね。だから、私はもう関わんない方がいいのかなつて考えちゃつて」

「あのごみいちゃんは、こんな可愛い梨花ちゃんを悲しませるなんて、小町的にポイント低いよー!」

「でも、八幡さんは高校生なんだし、彼女さんくらいいいもおかしくないよ。:」

「いやいや、うちのごみいちゃんに彼女ができるなんて、宝くじ当たるくらいありえないよー!」

「でも、昨日見た人と仲よさそうに話してたよ？ それに八幡さんも照れてたように見えたとよ？」

「うーん、多分だけど部活の人じゃないかな?どんな人だった?」

「うんとね、髪はピンク色で胸が大きい人だった!」

「お兄ちゃんの部活の人だよ!その人。全然彼女じゃないよ!」

「私の勘違いだったんだ。うー、恥ずかしいよ」

「真っ赤にしちやって可愛いなあ、梨花ちゃんは」

「で、でもどうしよう。私、てつきり彼女さんだと思っちゃって、もう関わっちゃいけないと思ってメアド消しちゃった」

「大丈夫だよ!私が教えるから!いやー、それにしても梨花ちゃんがまさかお兄ちゃんのこととこんなに悩んでたなんてね」

「そ、それはそうだよ。だって八幡さんに彼女さんがいたらって思うと、私と関わっていいのかわかって。彼女さんに申し訳ないなって考えちゃって」

「はあ、梨花ちゃんは考えすぎだよ!そんなに心配しなくても大丈夫だよ!」

「そ、そうかな?小町ちゃんが言うなら安心だよ!」

「もー、梨花ちゃん可愛すぎ!お兄ちゃんには勿体無いよ!」

「そう言っつて小町ちゃんは抱きついてきた。突然のことで私はびっくりした。

「ふえっ?!こ、小町ちゃん?どうしたの、いきなり抱きついてきて」

「いやあ、無性に抱きつきたくなっつて感じ?まあそんな感じなわけ!」

「そ、そっか」

「うん！それじゃ、今日お兄ちゃんにメールしてみてね〜！」

「うん！帰ったらしてみよう！」

小町ちゃんと一通り話していたら、朝のHRが始まった。

今日は頑張れる、そう思った私だった。